

361 Rasを介する腫瘍能とステロイドホルモンレセプター発現との関連

九大・生医研, 国立別府病院
加藤聖子, 加藤圭次*, 上岡陽亮, 八谷俊朗, 和氣徳夫

〔目的〕 Ras蛋白とステロイドホルモンレセプターが, 子宮体癌発生に関与する分子機構について検討した。

〔方法〕 1) 野性型Ki-Ras蛋白, 変異型 [¹²Val] Ki-Ras蛋白およびエストロゲンレセプター (ER), プロゲステロンレセプター (PR) を単独, または共に発現しているNIH3T3細胞株を樹立した。ER, PRの発現の変化をノザンプロット, ウエスタンプロットで解析した。2) プロモーター領域にestrogen responsible element (ERE) 配列をもつCATベクターを作成し, 上記細胞株に形質導入し, ERの転写活性を調べた。3) 各細胞株の腫瘍形成能を軟寒天培地上のコロニー形成, ヌードマウス上の造腫瘍能を用いて解析した。

〔成績〕 1) 変異型Rasを発現するK12V細胞ではNIH3T3細胞及び野生型Rasを発現するKwt細胞に比べ, ERの発現の増加がみられ, E2依存性にERの転写活性の上昇がみられた。2) KwtER細胞はK12V細胞と同様の形態変化を示し, 造腫瘍性を獲得した。両細胞でのトランスフォーム能の獲得はERによる転写活性の亢進を伴っていた。

3) K12V, KwtER細胞では腫瘍形成能のない細胞に比べ内因性PRの発現が有意に減少していた。

4) K12V細胞は導入された外因性PRの発現に伴い, 平坦化した細胞形態を示し, コロニー形成も抑制された。ERによる転写活性も抑制された。

〔結論〕 1) PRは変異型Rasが誘導するERを介する機能に拮抗し, また腫瘍能を抑制することが示された。2) Rasを介する腫瘍能にERの機能が寄与することが示唆された。

362 子宮体癌における頸部浸潤度とリンパ節転移例の関係について

駒込病院 澤 加奈子, 長井 浩明,
尾崎 喜一, 水谷 勝美, 村上 章

〔目的〕 本研究では, 当院にて初回治療を施行した子宮体癌TNM分類T1、T2で頸部浸潤とそのリンパ節転移陽性例及びその再発部位の関係について検討することを目的とした。〔方法〕 過去20年間で当院にて初回治療を施した子宮体癌268例中完全手術施行可能であったT1及びT2、154例についてその頸部浸潤の有無及び浸潤度、再発頻度及び部位を検討した。〔成績〕 手術術式は各症例毎に、広汎子宮全摘術または準広範子宮全摘術を選択し、加えて腎静脈起始部以下後腹膜リンパ節郭清を行った。術後診断pT1、116例中pN1、18例、再発確認は腔断端3例、骨盤内2例、遠隔リンパ節1例であり、うち1例は腔断端、骨盤内両者再発の計5例であった。この5例中広範子宮全摘術を施行したものは2例であり各々再発部位は腔断端と骨盤内のものと遠隔リンパ節であった。pT2は59例、うちpT2a 24例、pT2b35例でありpN1は各々3例、4例の計7例であった。再発確認はpT2aでの腔断端1例のみであった。この症例は準広範子宮全摘術を施行されていた。広範子宮全摘術施行例32例中pT2a 8例、pT2b6例であった。pN1は7例でありそのうちのpT1は4例であり、pN0は25例であった。〔結論〕 子宮体癌T1、T2において頸部浸潤の程度とリンパ節転移の有無及び再発率に関連は認められなかった。子宮体癌において術前の頸部浸潤は術式の選択に重要な異議を示さないと考えられた。